

コメント

山内博之 日本語教師の能力を高めるための類似表現研究

誤用分析という研究分野がある。現在の日本語教育研究の中では必ずしも脚光を浴びているとは言えないが、日本語教師にとっては重要なものである。なぜなら、日本語教育の現場で何らかの誤用の訂正を行った場合、原理的にはその全ての例が誤用と正用との類似表現であり、日本語教師は学習者に対してその違いを説明しなければならないからである。本稿では、こうした類似表現（特に実質語）の研究が日本語教師の説明力の向上に直接役立つということ、及び、そこから得られた知見を深めることで論文作成にもつながるといことが説得的に論じられている。(I)

杉村 泰 中国語話者における日本語の有対動詞の 自動詞・他動詞・受身の選択について ——人為的事態の場合

力を入れて苦労してようやく瓶のふたを開けたときに、日本語では普通「あっ、開いた。」と言う。これまでの日本語教育では、こうした「ナル」的表現については論じられてきた。しかし、こうした人為的な事態の場合に常に自動詞が使われるわけではない。例えば、「?ケーキが切れたから、食べよう。」はやや不自然で、「ケーキを切ったから、食べよう。」(「スル」的表現)の方が自然である。このような違いはこれまでほとんど論じられてこなかったが、本稿では、日本語母語話者と上級中国語話者に対するアンケートを用いて、両者の違いを明らかにしている。「常識」を知り、それを一歩踏み越えることで新たな発見が得られることを実証的に示した好論文。(I)

庵 功雄 「使役(態)」に言及せずに「使役表現」を教えるには ——1つの「教授法」

初級文法項目の1つである「使役」は、学習者には必要性の低い項目であることが、多くの先行研究で指摘されているが、初級シラバスから外しても、いずれかの段階では導入する必要がある。この論文は、教えられるべき「使役」は「～させられる(使役受身)」や「～させていただけませんか」といった「使役表現」であるとし、「強制・許容」の「使役」を教えずにこうした「使役表現」を導入する手順について具体的に論じたものである。(M)

孫 成志 「～テクレル」と「～テモラウ」系の
授受補助動詞の使用と習得
——JFL環境における中国人学習者を対象に

日本語の授受表現は、「クレル」の存在が特異である点で他言語にはあまり見られない特徴を持っているが、「テクレル」「テモラウ」といった補助動詞の使い方も学習者には難しいものである。本稿は、JFL環境の上級中国語母語話者と日本語母語話者に対して調査を行い、授受表現の使われ方の違いを考察したものである。調査の結果、「叙述」場面では学習者の方に授受表現の不使用が多かった。また、「負担度」に関しては母語話者の方が負担度が高いときに授受表現の使用率が有意に高く、学習者は授受表現の使用率の差に有意差はなかった。(1)

朱 薇娜 機能動詞「受ける」のヲ格名詞に対する一考察
——漢語動名詞を中心に

「彼は他人の意見に影響されやすい。」といった受身文は、ほぼ同じ意味で「彼は他人の意見に影響を受けやすい。」という形で「受ける」を使った文に書き換えることができる。本稿は、こうした受身文に対応する「受ける」文の特徴を考察したものである。考察の結果、「影響性」が高い場合は「受ける」文が成立しやすいこと、特に、二項述語の場合は「受ける」文が成立しやすいことがわかった。三項述語の場合は受身文が迷惑の意味を含意しやすいため、中立的な「受ける」文が使われやすいこともわかった。(1)

蔡 薰婕 形式副詞「分」の用法記述
——副詞節を形成する場合を対象に

この論文は、「分」という形式的名詞が格助詞を伴わずに従属節のように使われる用法を「程度」「比例」「原因・理由」に3分類し、3用法は連続性を持ちつつも、前後件に現れる述語の形態的特徴（テイル形の出現）、事柄の性質（時間的限定性）などに違いがあることを指摘した。また質的研究・記述にとどまらず、3用法の使用実態について大規模コーパス（BCCWJ）を用いて調査し、その分布を示した点で、日本語教育にも具体的に貢献できる研究となっている。(M)

セペフリバディアザム 日本語における自称表現

多様性が知られている日本語の自称表現について、その最新の状況を調査するために、この論文では、小・中・高・大・社会人の男女各25名を対象に家庭内での自称表現の使用をアンケート調査した。その結果、旧来通り、自称表現の使用には性差・場面差が強いということに加え、「こっち・こちら（小中・男）」という新しい表現が使用されていることなど、限られた人数ではあるが、文字通り現代の実態が明らかになっている。(M)

原田幸一 首都圏の若年層による「ゆうて(も)」の使用
——大学生による日常会話をデータとして

首都圏の若者は、西日本に典型的なウ音便形を含む「ゆうて・ゆうても」という形式を逆接の意味、あるいは補足の「ただ」のような意味で使用する。こうした「ゆうて・ゆうても」を分析するため、本論文では、大学生130人の日常会話53時間から、全121例を採集し、よく使用される文型「ゆうても…から。」などや、「ゆうて・ゆうても」の2用法、および聞き手への配慮という機能が見られることなどを指摘した。(M)

今村圭介 日本語学習者におけるスタイル変異形式の使用規則の形成
——使用実態と使用意識に着目して

日本語で話すときは(外国語と同様)様々な点で「スタイル」を使い分けている。例えば、丁寧体と非丁寧体の区別、逆接の接続詞として「が・けれども」を使うか「けど」を使うか、理由を表す場合に「ので」を使うか「から」を使うかといったことである。本稿は、日本国内在住の英語を母語とする中級～上級の学習者と日本語母語話者の接触場面での自然会話をとり、これらのスタイルに関わる変異(SVI)の現れ方を見たものである。考察の結果、これらの変異形が使われる背景には各話者が持つ社会言語学的規範意識などいくつかの要因が関わっていることがわかった。(I)

西尾広美 「やさしい日本語」使用の可能性と課題点
——幼稚園の事例研究を通して

「やさしい日本語」という概念が注目を集めている。これは外国人に対する情報提供の手段として有力なものである。本稿は、幼稚園で配布された文書を「やさしい日本語」に書き換えたときの効果を検証したものである。その結果、基本的には「やさしい日本語」に書き換えた方が理解は促進されたが、中にはそうならなかった点も見られた。(I)

森 篤嗣 教室内コミュニケーションにおける小学校教師の話法
——意識的・無意識的な話法の記述

文法の記述には目的によって様々なタイプがあり得る。本稿では、その一例として、小学校教師の発話を分析している。まず、教師が無意識に行っている発話(「コトバ」)と、意識的に行っている発話(「ワザ」)に分け、特に前者について詳しく考察している。例えば、コトバに関して、教師が無意識に用いている「体言止め」が子どもたちに理解上の負担コストをかけているといった指摘は、教室場面の丹念な観察と、日本語学の成果が融合したものとして貴重である。一方、ワザについて言えば、教師による巧みな言い換えによって子どもたちの理解が促されている例などが観察されている。(I)

山元一晃 教室談話における境界マーカー「はい」と教室外での使用
——その使用制約に注目して

教室談話において「はい」が境界マーカーとして用いられることはすでに指摘されてきたが、この論文では、日本の中学2年生に対する英語の授業の中に見られた「はい」を分析すると共に、「はい」は教室の外で用いられることがあることを確認し、その使用状況を分析した。日本語学習者が教室の中で、そして教室の外の生活の場で、「はい」をどのように聞いているか、自身の使用も含め、教師は一度考えてみる必要があるかもしれない。(M)

黄 明侠 意見文における「序列の接続表現」についての文法面の評価
——日本語母語話者と中国語母語話者との比較を通じて

この論文は、中国語母語話者が日本語で書いた意見文の中で、序列の接続表現の使用が低く評価されたことを受けて、日本人が書いた意見文と比較しつつ、中国語母語話者がどのような接続表現を選択したかを分析したものである。その結果、使用されている接続表現、その組み合わせ、接続表現と文末との対応に不適切な点があることが見いだされ、それが低評価に繋がると指摘する。教育現場にすぐにも応用できる成果が記された研究といえるだろう。(M)

陳 昭心 テモの不使用についての一考察
——中国語の母語干渉の観点から

日本語で逆接条件形式「ても」を使用する場合に、他言語では順接条件形式を使用する場合がある（例：We'll finish it if it takes us all day. (ジーニアス英和辞典)）。この論文は、中国語のそうした例文について、「逆接」と「譲歩」とを区別した上で検討し、中国語は英語ほどではないにしても、話者の想定する前提や期待に日本語ほどは敏感ではなく、逆接条件形式「ても」の使用が従来考えられているほど易しくはないことを指摘する。同様の問題は他言語母語話者にも生じていることが予測できる。(M)

竹口智之 サハリン州 (ユジノサハリンスク市) における
日本語学習動機の変容過程と要因

これまでの動機付け研究は、統合的・道具的、あるいは内発的・外発的といった様々な動機の種類や、動機が関わる要因についての研究が中心であったが、この論文は、学習者の動機を縦断的に調査することにより、「留学」や「資格取得」といった動機付けも、学習が進み、学習者の状況が変化する中で、異なる意味合いを持つことを実証的に論証する。海外の1地域における日本語学習者の動機付けがどのように移り変わっていくのか、その多様性と変容を示す具体的事実も興味深い。(M)